

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	永田由香
論文題目	認知文法に基づく構文分析—交替現象を中心に—		
（論文内容の要旨） 本論文は、認知言語学の枠組みに基づき、日常言語における構文のメカニズムの解明を試みた理論的・実証的研究である。全体は7章からなる。 第1章では、本研究で考察する構文現象の分析の基本的な枠組みとなる認知言語学の基本概念と理論的な枠組みを概説している。 第2章では、本研究の構文分析のモデルとなる記号論的文法観を提示する。本章では、この文法観に基づき、日常言語の構文を形式と意味の対からなるゲシュタルト的な記号ユニットとしての構成体（construction）と見なし、従来の形式文法の構文規定（特に生成文法に代表される構文の派生的規定）に対し、ゲシュタルト的な記号ユニットに基づく構文のネットワークによる再規定を試みている。 第3章では、本論文で採用する以上の構文分析のモデルの妥当性を、他の文法モデルとの比較を通して確認するために、認知言語学の研究でこれまで提案されている構文文法の代表的なモデルを概観し、各モデルを批判的に検討している。本章では、特にこれらの代表的なモデルとして、Fillmore の単層化構文文法、Goldberg の認知的構文文法、Croft の根源的構文文法を批判的に検討し、これらのモデルに関し、以下の問題を指摘している：(i) 形式と意味の複合ユニットとしての構文の形式が音韻極のレベルではなく、理論的に仮定される抽象的な統語形式のレベルに基づいている、(ii) 記号の複合ユニットとしての構文の構成要素の意味を重視し過ぎ、構文自体を特徴づけるゲシュタルト的な意味が十分に考慮されていない。(iii) 英語を中心とする語順主導型の構文分析が中心となり、日本語のような格標識主導型の構文現象が分析されていない。以上の考察のもとに、本章では、構文現象を包括的に記述・説明する枠組みとして Langacker の記号論的文法観に基づく認知文法のモデルを採用し、このモデルに基づく構文分析の一般的な展望を図っている。 第4章では、構文分析の中心的な研究テーマとして、英語と日本語の交替現象の分析を試みている。本章では、特にこの現象の中核をなす壁塗り構文の交替現象 ((i) X V Y with Z/X V Z on Y. (ii) X-ガ Y-ヲ Z-デ V/X-ガ Y-ニ Z-ヲ V [e.g. (i) a. John sprayed the wall with paint./John sprayed paint on the wall. (ii) a. ジョンが壁をペンキで塗った。/ b. ジョンが壁にペンキを塗った。]) に関する語彙概念意味論の分析を批判的に検討し、認知文法の観点から構文の交替現象に関する新たな記述・説明を試みている。語彙概念意味論では、この種の構文の交替現象の説明として、問題の対の文に生起する動詞（V）に異なる語彙概念構造を仮定し、リンキング規則により、交替の対を構成する表層の構文形式と結びつける分析を試みている。本章では、この説明は循環論である点を指摘している。すなわちこの分析は、どうして構文の交替現象が起こるのかの問いに、「問題の動詞が交替型の語彙概念構造をもつ動詞だから」と答え、逆に何故そのような概念構造をもつのかという問いに、「その動詞が構文交替に現れるから」と主張する。この点で、語彙概念意味論の説明は循環論である。			

これに対し本章では、この種の構文の表層分布を、認知文法の枠組みに基づき、言語主体の事態把握の認知プロセスの違い（i.e. 同じ事態のどの部分に焦点を置き、どの部分を背景化するかに関する図／地の反転の違い）として再規定している。本章では、さらにこの反転現象を動機づける制約として、(i) 道具・手段と移動物の制約、(ii) 移動物の具体性・抽象性の制約、(iii) モノに対する影響性の制約、(iv) 移動の着点性の制約を指摘し、この種の制約に基づいて表層レベルの構文の分布関係の一般的な説明を試みている。

第5章では、構文の交替現象に関わる統語的な制約を考察している。一般に認知言語学の構文研究では、文の意味規定においては、ゲシュタルト的な構文の意味が重要な役割を担うとされている。またこれまでの構文研究では、構文のゲシュタルト的な特性を規定する要因として、（英語に代表される）語順のパターンが特に重要な意味をもつとされている。しかし、従来の構文研究では、基本的に語順が自由であるとされる日本語の構文パターンの研究はなされていない。本章では、従来の日本語研究の通説に反し、日本語においても、格助詞を伴う名詞句の語順のパターンが、構文の位置づけに重要な役割をになっている事実を明らかにしている。本章では、特にコーパスに基づく統計的手法により、実際に使用されている日本語の構文の交替現象に関わる言語事例を分析している。具体的には、『日本語語彙体系』（NTT基礎研究所）の新聞記事のデータを対象とし、構文交替に関わる対の一方の例（e.g. 「X-ヲ Y-デ V」 / 「Y-デ X-ヲ V」）に対して、名詞句の意味クラスと動詞の意味クラスを分析している。この分析の結果、同じ格助詞によってマークされる名詞句からなる構文においても語順の違いが、構文パターンの自然さに影響し、語順の異なる対にプロトタイプ効果の違い（上記の場合、「X-ヲ Y-デ V」の構文パターンの優位性）を生じさせる事実を明らかにしている。また、本章では、構文パターンの自然さが、動詞と共起する名詞句の意味的な性質によって左右される事実を明らかにしている。これまでの構文研究では、動詞の意味が構文パターンの自然さに影響する点は重要視されているが、名詞句の意味的な役割の重要性は指摘されていない。

第6章では、認知文法の枠組みに基づく構文現象のネットワーク規定の問題を考察している。これまでの構文研究（特に、英語の構文研究）では、関連する構文は、多義性のリンク、部分関係のリンク、メタファー的拡張のリンク、等の継承リンクに基づいて規定されている。本研究では、日本語の構文現象に関し、関連する構文の分布関係を、この種の継承リンクと<スキーマ>/<事例>の継承リンクに基づいて階層的に規定している。特に本章では、日本語の交替現象に関わる構文の分布関係を、多義性、メタファー、等の継承リンクに基づく階層関係だけでなく、「NP-C NP-C V」（C：格標識）という上位の構文スキーマとこのスキーマの名詞句の抽象度を指定する構文パターン（e.g. 「NP[具象]-C NP[具象]-C V」、「NP[抽象]-C NP[具象]-C V」、等）の継承関係に基づく構文ネットワークによって規定している。

第7章は、認知文法の枠組みに基づく構文分析の意義と今後の構文研究の課題について論じている。

(続紙 2)

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、認知言語学の枠組みに基づき、日常言語の構文現象の解明（特に、構文の交替現象の解明）を試みた理論的・実証的研究である。

生成文法を中心とする従来の理論言語学の構文研究では、動詞の内在的意味が文の中心的な意味とされ、構文自体は、深層構造からの派生による随伴現象であるとしている。これに対し、本研究は、記号的文法観に基づく認知言語学の構文文法の観点から、日常言語の構文は、形式と意味の対からなるゲシュタルト的な記号ユニットとしての構成体 (**construction**) と見なし、生成文法による構文の交替現象の派生規定に対し、ゲシュタルト的な記号ユニットとしての構文ネットワークによる再規定を試みている点に独創性が認められる。

これまでの構文研究（特に、英語の構文研究）では、関連する構文は、多義性のリンク、部分関係のリンク、メタファー的拡張のリンク、等の継承リンクに基づいて規定されているが、これらのリンクによる構文の表層分布の記述が主眼となっており、以上のリンクにより特徴づけられる構文間の階層性は体系的には明らかにされていない。これに対し本研究では、日本語の構文現象に関し、関連する構文の分布関係を、この種の継承リンクと<スキーマ>/<事例>の継承リンクに基づいて階層的に規定している点が注目される。この分析は、英語をはじめとする他の言語の構文間の継承関係と階層性を明らかにしていくためのケース・スタディとしても重要な意味をもつ。

英語の分析を中心とする従来の構文研究では、構文のゲシュタルト的な特性を規定する要因として、語順のパターンが特に重要な意味をもつとされている。しかし、これまでの構文研究では、基本的に語順が自由であるとさる日本語の構文パターンの研究はなされていない。本論文では、日本語研究の通説に反し、日本語においても、格助詞を伴う名詞句の語順のパターンが、構文の位置づけに重要な役割をになう事実を指摘している点が注目される。さらに、本論文では、構文パターンの自然さが、動詞と共起する名詞句の意味的な性質によって左右される事実を明らかにしている。これまでの構文研究では、動詞の意味が構文パターンの自然さに影響する点は指摘されているが、名詞句の意味的な役割の重要性は指摘されていない。

理論的な観点からみた場合、本論文は、認知言語学の枠組みにおける構文研究で提出されている各種の代案モデルの記述面と実証面の妥当性を検討している点が注目される。本論文では、特に認知言語学における構文研究のモデルとして、**Fillmore** の単層化構文文法、**Goldberg** の認知的構文文法、**Croft** の根源的構文文法を、特に構文の交替現象との関連で批判的に検討し、これらのモデルでは包括的に記述・説明が不可能な構文の交替現象を一般的に規定するモデルとして、**Langacker** の記号論的文法を拡張した新たな構文モデルを提示している点に独創性が認められる。これまでの認知言語学の研究では、構文分析の代案モデルの妥当性に関する比較・検討は本格的にはなされていない。本研究の以上の考察は、科学哲学的な観点からみた文法モデルの比較・検討の観点から見ても重要な示唆を与える。

本論文は、さらに次の点において、認知言語学における構文研究に、新たな知見を提示している。第一に、まず動詞にのみ注目していたこれまでの構文の先行研究の限界を示し、動詞と共起する名詞句の意味も考慮した意味合成のプロセスと構文スキーマ

マに基づいて構文の交替現象の説明を試みている。第二に、構文が指示する事態の意味を、パースペクティブ(perspective)、解釈(construal)といった話者の視点を反映する認知的な意味として規定し、生成文法の枠組みでパラフレーズの関係にあると見なされる構文の認知的な意味の違いを明らかにしている。第三に、これまでの構文研究で区分されていた語彙レベル、句レベル、文レベルの言語ユニットをゲシュタルト的な意味をになう構成体として統一的に規定している。第四に、作例だけでなく、コーパスに基づく統計的手法により、実際に使用されている日本語の交替現象に関わる言語事例の分析を行い、構文の交替現象の中核となる動詞の意味クラスの分類を試みている。以上の研究は、文法研究と意味研究における主要な問題（文の構成要素の意味と構文自体の意味の関係、言語表現の意味の主観性、言語表現の同義性と多義性、レキシコンと文法の関係、等の問題）の解明に際し、重要な知見を提供する。

本研究は、主に構文の交替現象の共時的な視点からみた文法研究を主眼としており、通時的な視点からの構文分析はなされていない。しかし、本研究の共時的な視点からの構文の交替現象とメタファーの継承リンク、メトニミーの継承リンク、等の構文の拡張関係の分析をさらに進めていくなれば、動的な言葉の変容プロセスによって特徴づけられる日常言語の記号系の一面を、より体系的に分析していくことが可能となる。この点で本研究は、通時的な構文研究のための基礎研究としての意義が認められる。また、本論文の交替現象の基本原則となる構文の拡張と継承のメカニズムの研究は、日常言語の中核をなす文法の発現のメカニズムを解明していくための基礎研究としても重要な役割をになう。

今後の課題としては、共時的な観点から見た本研究の構文の交替と継承のメカニズムの研究を、言語習得における構文の習得順序や通時的な構文の出現順序の観点から検討する必要がある。また、本研究は、これまでの認知言語学の構文研究と同様、単一の構文の研究が主体となっている。しかし、構文によっては、その構文の前後の構文との関係が理解できない限り、当該の構文の慣用的な意味(ないしはその構文のゲシュタルト的な意味)が把握できない事例も存在する。構文の意味の実態をより具体的に捉えるためには、さらに隣接対からなるグローバル構文の観点から構文の意味分析を行っていく必要がある。以上の問題は、今後の研究課題として残される。

本申請者が所属する言語科学講座の目的の一つは、言語の構造、意味、運用、等にかかわる人間の知のメカニズムの解明にあるが、本研究は、この目的に沿った基礎的研究として高く評価できると共に、今後の言語学と認知科学への貢献がさらに期待される。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成23年9月27日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降